



TITLE:

爲替價值に関するカッセル説に就いて

AUTHOR(S):

高田, 保馬

---

CITATION:

高田, 保馬. 爲替價值に関するカッセル説に就いて. 經濟論叢 1919, 8(2): 284-290

ISSUE DATE:

1919-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127484>

RIGHT:

## 雜 錄

### 爲替價值に關するカッセル 說に就いて

高田保馬

瑞典のカッセル教授は其爲替價值に關する學說を支持せんが爲に、各國の物價、通貨、爲替相場の統計に基いて極めて巧妙なる證明を試みて居る。此證明の當否を吟味するのが此小論文の主意である。

カッセルの爲替價值に關する思想の大體は別に新しい事は無い、たゞ其主張の徹底的なる點に於て色彩の極めて鮮明なるを覺ゆる。其考によれば、爲替相場従ひて一國の貨幣の爲替價值(Kurswert)或は對外價值(Aussenwert)は彼我の貨幣の國內に於ける購買力即ち物價の高さによりて定まる、而して此購買力は貨幣の數量によりて決定せらるゝが故に、畢竟爲替相場は各國の通貨の膨脹(inflation)の比較的大さにより

て定まるものである。云ふ迄もなく此主張は近時の有力なる學說と一致するものではない。多數の學者の考によれば、貨幣の國內に於ける購買力と其爲替價值との間には決して直接なる聯絡は存しない。爲替相場の最も有力且直接の原因は國際貸借の關係である。國內に於ける貨幣の購買力はたゞ此國際貸借の關係に作用する事によりて、間接に爲替相場に影響を及ぼしうるのみである。而して國際貸借の關係が物價以外複雑なる事情によりて決定せらるる以上、爲替相場が専ら各國國內の物價によりて決定せらる可き道理は無い。事實に於ても亦貨幣の國內に於ける購買力と其爲替價值とが相伴はず、其間不可離の聯絡なき事は過去の史實、殊に紙幣の減價に關する統計の明示し來れる所である。然るに、カッセルはかゝる考をすてて徹底的に爲替價值は國內物價の函數なりと云ふ、而も其態度の徹底は之に止まらない。貨幣數量說のそのまゝ承服し難き事、そのまゝ事實に實現せられ難き事は争ひ難き所である。然るにカッセル

はまた此數量説をも躊躇する所なく是認して居る。吾人の信ずる所によれば通貨の數量と物價との間にも一義的な聯絡はない、物價と爲替價値との間にも一義的な聯絡はない。然るにカッセルにありては此二の聯絡が認められ、從ひて、通貨の數量と爲替價値との間に一義的聯絡が認められる。更に語を換へて述べて見よう。吾人にとりては、通貨の數量から直接に物價に行く橋がない、また物價から直接に爲替價値に行く橋がない。カッセルにありては此橋が二つながら存し、通貨から當然爲替價値に渡り行けるのである、通貨の數量を知れば爲替價値を知り得べき筈である。

此二つの聯絡が是認せらる可きや如何、之を理論的に吟味するのが今の仕事ではない。吾人の今問題とするのはカッセルが其考を支持せん爲に挙げたる巧妙の計數的證明である。而してカッセルの此證明にして成效せるものであるならば、少くとも有力なる學說（即ち國際貸借を中心とする爲替價値説、非貨幣數量説）は其改

造の必要を暗示される譯である。

カッセルの證明の大略を次に掲げる。爲替相場が彼我の貨幣の國內に於ける購買力によりて定まり、此購買力がまた通貨數量によりて定まるならば、今日戰時に於ける各國の通貨膨脹の程度を知る時は之によりて爲替相場の變動を算出し得べき筈である。また逆に甲國の通貨膨脹の程度と甲乙二國間の爲替相場を知る時は乙國の通貨膨脹の程度を算出し得べき筈である。先づ前の點から實例によりて説明を加へよう。

今瑞典英吉利二國に於ける通貨膨脹の程度が與へられ、且つ戰前の二國間の爲替相場が與へられて居れば、前者の比を後者に乗ずる事によりて爾後の爲替相場が得られる譯である。瑞典に於ける通貨（紙幣）の流通高は一九一三年には二億九百九十萬クロオンであつた。通貨の必要に應ずる増加は其膨脹ではない。此種の増加は先づ人口の増加に伴ふものと見れば年々一・五%である。從ひて通貨の膨脹なかりしものとすれば一九一五年の通貨流通高は二億千三百十萬

クロオンであらう。之を以て同年の實際の通貨を除すれば通貨膨脹の指數が得られる（左表の月々の數字は一九一五年の指數を土臺にして、一九一〇年より一九一三年まで四年間に於ける月々の變動によりて算出したるものである）。英國の通貨膨脹の指數としてはソオアアベツク（スタチスト）の物價指數を用ふる。左表の數字は戦前の物價指數一・二を以て、月々の物價指數を除したる商である。瑞典の指數を英國の指數を以て除したる比を今假に爲替係數と名づける。戦前の爲替相場に此係數を乗すれば月々の爲替相場が算出せられる。而して之を事實の爲替相場に比較すれば其適合は左の如きものがある。

	通貨膨脹指數 (瑞典)	通貨膨脹指數 (英國)	爲替相場 (推算)	爲替相場 (事實)
一九一五年二月	一二・四	一二・〇	一六・一	一六・四
三月	一二・一	一二・〇	一六・一	一六・四
四月	一二・〇	一二・〇	一六・一	一六・四
五月	一二・八	一二・〇	一六・一	一六・四
六月	一二・五	一二・〇	一六・一	一六・四
七月	一二・五	一二・〇	一六・一	一六・四

八月	一二・六	一二・四	一六・一	一六・五
九月	一二・〇	一二・四	一六・一	一六・二
十月	一二・七	一二・四	一六・一	一六・二
十一月	一二・七	一二・四	一六・一	一六・二
十二月	一二・〇	一二・四	一六・一	一六・二
一九一六年一月	一二・〇	一二・四	一六・一	一六・二

カッセルは進みて佛、獨、露三國に關しても瑞典との間の爲替相場について同様なる關係の存する事を説き、轉じてまた露西亞について、爲替相場から露國の通貨膨脹の程度を推算し事實の通貨數量と比較して居る。此推算の方法は次の通りである。Sを瑞典の通貨數量とする、Rをストックホルムに於けるペトログラード宛爲替の相場とし、Pを平價（一九一）とする。 $\frac{S \cdot P}{R \text{ or } S \cdot R}$  は即露國の通貨數量を示すものである、事實の數量は此推算と極めて相近い（其計數は茲に省略する）。

さて、此計數的立證は極めて巧妙に行はれて居ると云はなければならぬ。事實と推算とは比較的によく接近して、一見カッセルの主張を事實上の根據あるが如くに思はしめる。説いて云

ふ、爲替相場を左右する根本の原因は各國に於ける通貨膨脹の程度である、國際貸借又は一國の將來に對する信用如何の如きは副次的作用を營むに過ぎない。而して、デル・ヴェツキオの如きも此論文を引用して明白に賛同の意を表して居る。併しながら、之に關して吾人は多少の疑問を有する。

勿論カツセルの此立證は其取扱へる範圍に於ては稀なる成功と巧妙さを示して居る。或學説を證せんとして統計的材料を取扱つた經驗のある者は皆之を認めるであらう。併しながら、此證明方法が他の場合に應用せられても同一の結果を示す否やは殘されたる問題である。而して其結果にして如上のものと異なるならば、カツセルの如上の材料の取扱に於ける成功も其所論を支持する力なきものとなるであらう。蓋し一般的法則は例外を許さぬからである。勿論カツセルの取扱つたる方法其物には幾多の疑點もあるが以下なる可く之に従ふ事とする。吾人は先づ此方法を我日本の材料に應用して見たい。

雜 錄 爲替價值に關するカツセル説に就いて

日本物價指數 ( $P$ )	英國物價指數 ( $P_1$ )	$\frac{P}{125.9}$	$\frac{P_1}{81.2}$	$\frac{P}{P_1}$
一九一六年三月	115	115	130.8	1.00
六月	112	112	131.0	1.01
十二月	113	113	134.3	1.00
一九一七年六月	112	112	130.2	1.00
九月	113	113	134.3	1.01
十二月	115	115	136.5	1.01
一九一八年三月	113	113	134.3	1.01
六月	112	112	131.0	1.01
爲替相場 (正金建) (參着拂)				
戰前	100	1		
一九一六年三月	105	1.05		
六月	112	1.12		
十二月	115	1.15		
一九一七年六月	112	1.12		
九月	113	1.13		
十二月	115	1.15		
一九一八年三月	113	1.13		
六月	112	1.12		

(註) 日本物價指數は日本銀行調査、英國物價指數はソオアアベック指數(スタチスト)、一二五・九及び八一・二は日本及び英國の戰前に於ける物價指數である。

爲替相場 (正金建) (參着拂)

(註) 日本物價指數は日本銀行調査、英國物價指數はソオアアベック指數 (スタチスト)、一二五・九及び八一・二は日本及び英國の戰前に於ける物價指數である。

(2) DelVecchio, Questioni di economia teorica relative alla guerra, Giornale degli economisti etc. Agosto 1916.



一九一五年 一月—三月	二二	二・八四	二・三三
七月—九月	二三	三・五五	二・六八
一九一六年 一月—三月	二〇八	二・六六	二・六一
七月—九月	二六	二・六六	二・六八
一九一七年 一月—三月	二二六	二・六六	二・六八
七月—九月	二〇九	二・七四	二・六八
十月—十二月	二四	二・三三	二・六八
一九一八年 一月—三月	二〇八	二・六六	二・六八
四月—六月	二二七	二・九六	二・九六

以上の結果は吾人をして、カッセルの瑞典に就いて得たる結果が瑞典特有の事情に基いたもので決して一般にさう云ふ譯のものでない事を認めさせる。人或は云ふであらう、これ日本が東洋にあつて英佛の諸國との距離も遠隔であり且つは戦時の事で交通も障礙が多く、輸出入も自由に行はれず、又日本には輸出増加の爲に爲替相場の上に多少の人爲が加へられて居た結果であらう、此等の事情がなかつたならば、カッセルの瑞典に試みたのと同じの結果が得られるのではないかと。しかしながら、此瑞典の事實

すらも其後漸々カッセルの主張を裏切る事著しい様である。瑞典に於ける兌換券流通高左の如し。

一九一四年七月三十一日(開戦の時)	三八四三・七千クローナ
一九一四年十二月三十一日	四〇四〇・八
一九一五年十二月三十一日	五七七八・六
一九一六年十二月三十一日	四七五七・七
一九一七年十二月三十一日	五二七三・三
一九一八年六月十五日	六四二二・〇

今年々一・五%の増加を以て必要に應ずる増加と見てゆけば一九一六年末一九一七年末に於ける通貨膨脹の程度はそれぞれ一九三、二六一である。前掲の方法に従ひて推算を行へば其結果は次の如し。

瑞典の通貨膨脹(S)	英國の通貨膨脹(左)
一九一六年末	一九五
一九一七年末	二六二
爲替係數(S) 爲替相場(推算)	爲替相場(事實)
一九一六年末	一〇三
一九一七年末	二二四
推算は一八一四年一月の爲替相場一八・二三と	二・三三(十月)
一八一四年八月の爲替相場一八・二五の平均一	二・三三(十一月)

八二四を一〇〇とし之にS/Eを乗じたのである。推算と事實との相違如何に甚しきかは數字の示せる通りである。

吾人と雖も、カツセルの云ふが如く、各國に於ける物價水準の差異が爲替相場を決定する有力の一原因たる事を認める。然れども、二者の數字が現實に於て比例する程の關係があるとは信じ得ない。若し、國際貸借に影響を及ぼす他の事情の作用にして全く存せざるものとすれば各國に於ける物價が相均衡せんとする運動の結果として（直接には輸出入の關係よりして）、爲替相場は結局物價水準の比例に落ち付く傾向を有するであらう。併しながら、一方此傾向が實現せらるゝまでには多少の時日を要し、他方また國際貸借に關係ある事情は此外になほ有力なるものが常に存在する。従ひて實際の爲替相場は決して各國に於ける物價の比例と一致す可き性質を有するものではない、カツセルが其主張の立證を事實の計數の上に求めたのは甚だ無理なる計劃である。而して立證の方法は極めて巧

妙なるに拘はらず、少しく以外の資料に及ぼす時、明に反對の結果に到達するのは當然の事と信ずる。